

木曽川中流域かわまちづくり協議会

設立趣旨

木曽川は、濃尾平野を潤す母なる大河として、古来より我々の生活を支え、豊かな恵みを提供するとともに、時として増水し生活を脅かすこともありました。

古くは、木曽地域の山々から切り出した木曽ヒノキなどの木材を運ぶために舟運が発達し、沿川には川湊が形成されていました。また、木曽川と並行して江戸と京の都を結ぶ重要幹線として利用された中山道では、街道沿いに宿場町が発達し、木曽川を渡る難所には「太田の渡し」で代表される渡し場が設置されるなど、多くの旅人が往来する場でした。中山道は、河川の増水による影響を受けやすい東海道に比べ、予定通り通行できると旅人に好まれたと言われていました。このように、木曽川は交易、経済の要衝であるとともに、群雄割拠して天下をうかがう戦国の世には、犬山城をはじめとする城が木曽川沿いに複数築かれ、政治的、軍事的な拠点としても重要な役割を担っていました。

その後、我が国の近代化に伴い河川の利用形態や人流・物流が変化し、人々の社会生活と河川空間との密接な関係が薄れてきました。

こうした中、国土交通省では、地域の景観、歴史、文化及び観光基盤などの「資源」や、都市部の貴重なオープンスペースである河川敷地を活用した快適で賑わいのある水辺空間の創出を目指し、平成21年に「かわまちづくり支援制度」を創設し、平成23年には河川敷地占用許可準則の改正等に取り組んできました。木曽川では、美濃加茂地区や可児地区でかわまちづくり計画を推進し、また、国営木曽三川公園などの河川公園やサイクリングロードなどを整備してきました。さらに、岐阜県では今後、木曽川中流域の自治体、観光関係者らと連携し木曽川流域の新たな観光資源のブランド化に取り組む方針であるなど、木曽川をまちづくりや地域活性化の主要な資源として活用しようとする機運が高まっています。加えて、少子高齢化や水災害の多発など、近年の社会経済情勢を踏まえ、地方経済の活性化や防災・減災への配慮も求められています。

このような状況を踏まえ、木曽川中流域において、岐阜県・愛知県の関係市町及び木曽川を管理する国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所が連携し、既存の資源を最大限に活用した流域の魅力の向上、木曽川を基軸としたヒト・マチ・オモイのネットワーク化を図り、安全・安心で賑わいのある豊かな川のある暮らしを実現することを目的に「木曽川中流域かわまちづくり協議会」を設立します。